

図書館史研究会 ニュース・レター

第29号 昭和62年11月10日

*前回から連載の河井弘志氏の研究ノート「ドイツ近代公立図書館思想の特質と英米からの影響」は今回で終了になります。

*運営委員会報告 10月10日(土)午後7時から8時まで、法政大学富士見校舎にて開催。出席は、石井敦、鮎沢修、油井澄子、是枝英子、阪田蓉子、常盤繁(編集委員長代理として)、河井弘志(傍聴)、おもに『図書館史研究』(第五号)の計画と、IFLAから要請されている名簿の件、さらに会費について検討した。次回の運営委員会は、12月4日(金)夕刻から。

*事務局より

間山洋八氏が、1986年11月3日、「社会教育関係資料館」を開設されました。現在約2万点を所蔵しておられます。「皆さんの今後のご協力、ご指導(特に資料の寄贈)をお願い申し上げます」とのことです。

寄贈本のお知らせ。青山イトさんから青山大作『図書館随想』が当研究会に寄贈されました。借り入れご希望の方は、事務局へご連絡ください。送料はご負担願います。

IFLAの名簿の件については半数の会員からご協力いただきました。事務局で翻訳ならびに原稿を作成し、年内にはドイツにつくよう発送する予定です。

原稿を募集します

『図書館史研究』第5号の原稿を募集します

今回は論文のテーマはいっさい限定しません。

応募：応募希望者は下記まで題目と簡単な要旨をそえ12月末日までに御連絡下さい。ふるって、ご応募下さい。

是枝英子

注意：最終的な完成原稿の提出締切は1988年3月末日、400字詰め原稿用紙で50枚。採否については編集委員会が検討します。

ニュースレターの原稿を求めます。図書館史文献の書評、紹介を中心に、図書館史についての短文を希望します。枚数は400字×12枚程度まで。原則として原稿が到着した次号のニュースレターに掲載します。原稿はワープロでも歓迎しますが、その時は、このニュースレターの書式に合わせていただけると好都合です。36字×33行です。

送付先

川崎良孝

今夏のセミナーについてのアンケート結果 ——一部紹介——

- *参考になる点が多くありました。
- *図書館史を研究する場合、時代背景が必要なのではないのでしょうか。「参考資料」として、年表がほしいと思いました。
- *国会図書館の場合は、科学技術資料の役割が必要だと思いました。それが、情報化社会政策に結びつくものであるし、今後、図書館の在り方を歴史を通じて探る場合、この科学技術資料をぬきにしては考えられないように思います。
- *少々静かなセミナーになったように思う。整理技術の問題が報告の中に入っていたのは、よかったように思う。
- *発表者の都合もあると思うのだが、出来るだけ総括討論に参加していただくようにしてもらった方がよいと思う。
- *有益だった。
- *テーマに対して一つの方向を見出したのではないか。
- *他館種の歴史を聞いたことはよかった。
- *図書館運動史、外国の図書館史、人物論、植民地の図書館史を採り上げて欲しい。
- *裏面史のようなものを重視する必要がある。
- *大変勉強になりました。
- *図書館の図書館史（公共）について、青年図書館員連盟などを採り上げて欲しい。
- *どの発表もとても興味深いものでしたが、それだけにもっと時間をかけて、じっくりうかがいたかったというのが実感です。
- *図書館員としてまだ未熟だが、これから図書館について知識を広めていきたい。

ベルリン大学教授ラウマーも、ブルームの影響を受けた民衆教育運動の指導者である。ラウマーは御料地の管理にあたった営農家の息子で、ハレ、ゲッチンゲン兩大学で法学・歴史学を学び、卒業後は父のすすめで農学を学び、ベルリンの官署に就職、役人として勤務するかたわら歴史研究を継続し、その業績により1811年にブレスラウ大学教授、1819年にはベルリン大学教授に就任、1823-25年には畢生の大著 Hohenstaufen 研究書全6巻を刊行した。¹⁾

ラウマーはよく旅行をしたが、その度に日記・書簡風の記録を書きつけ、出版した。1835年、1841年にはイギリス旅行、1839年はイタリア旅行、1845年にはアメリカ旅行、1848年にはパリ出張と、かなり長期の旅行をし、それぞれ旅行記を刊行している。このなかで、イギリス旅行とアメリカ旅行がラウマーにおよぼした影響はきわめておおきく、これから彼の民衆教育運動と公立図書館設立運動がよびおこされた。

1835年の旅行記には、イギリスの民衆教育運動が紹介されている。すなわち、イギリスでは様々の目的の民間団体 (Verein = Club) が組織されている。これらの団体・クラブでは、共同の食事パーティよりも、いっしょに新聞を読むなどの活動がこのまれ、文芸的要求 (literarische Beduerfnisse) が重視され、部屋には地図やパンフレットをそなえつけ、ついにはアシニアム (Athenaeum) のように「立派な図書館」 (vortreffliche Bibliothek) を設置するものも現われた。アシニアムは会員から年会費6ポンド6シリングをとり、新入会員からは21ポンドの入会金をとる。

ロイヤル協会 (Royal Institution) はさまざまな知識分野の講義をおこない、昼間は婦人、夜間は男性がこれを聴講する。ドイツのアカデミーが聴講者がすくないのにくらべて、ロイヤル協会は多くの人々が参加する。ロンドン職工学校 (London Mechanics Institution) は、講義、学校の授業、および図書館利用を結合する役割をはたしている。有用知識普及協会 (Gesellschaft fuer Verbreitung nutzlicher Kenntnisse) は、聖書協会をのぞくあらゆる団体のなかで、もっともさかんに活動している。この協会は「民衆教育は読書によって行うことができる；民衆のために有用図書を書き、従来よりもはるかに多くの売れ行きをあげれば、ずっと安価に売ることができるといふ、全く正しい考えから生れたものである。」²⁾

協会は、農業、家畜、年鑑などさまざまな図書を安価に出版し、これによって「悪質の、非道徳的な、誘惑的な通俗図書 (Volksliteratur)」の不当な流布を防ぐうえで一定の役割をはたした。もし検閲官自身がすぐれたペニー雑誌 (Pfennigmagazin) を発行することができれば、あやしげな文学の追放に一層寄与できるであろう。³⁾

ブルームの著書には直接言及していないが、ブルームの読書普及運動にたいするラウマーの関心のよせかたは尋常ではない。パークベックのロンドン職工学校から受けた強烈な印象とともに、その後のラウマーの民衆教育活動において、強い指針となるのである。

1841年のイギリス旅行では、チャーチスト運動を中心とする労働運動がラウマーの心をとらえた。たとえば、主要工業都市における労働者階級の人口が、全住民の64~97%にたったこと、⁴⁾ 社会主義運動・チャーチスト運動の思想と動向など⁵⁾ に関する詳細な記録がある。チャーチスト運動については、請願書の文面がフランス革命当時を思わせるほどに過激になっているが、その原因は貧困やエゴイズムにあり、こうした社会悪を根絶しないで、運動を武力で弾圧しようとするのはよくない、とのべ、さらに次のような見解を展開している。

「この闘争をたたかいぬくには、武器をもってしたり、単なる形式的な国法によるのではなく、適切なる貧民法、知識教育・宗教教育、あるいは、うたがいなく富者よりも貧民を圧迫している税制の改革をもってすべきである。」⁶⁾

つまりラウマーは、支配者階級の立場から「闘争をたたかいぬく」ための手段のひとつとして、貧民法、税制改革とならんで、労働者教育をあげているのである。

成人教育については、アメリカのユニテリアン牧師で、民衆啓蒙に力をつくし、アメリカ公立図書館運動の精神的指導者となったチャニング(William E. Channing)の、労働者教育に関する講演を引合いに出しつつ、タムワースに開設された読書室・蔵書(ein Lesezimmer und eine Buechersammlung)の概要を紹介した。⁷⁾ これは会員制図書館で、3カ月1シリングの会費を払えば利用できる。政治的、宗教的立場が何であるかは全く問わない。将来的には、地図、地球儀、植物、実業に関係する鉱物なども収集する、一種の博物館の構想もある。自然科学・人文科学の諸分野にかんする、一般民衆対象の通俗講演(verstaendliche Vorlesungen)を行う計画もある。啓蒙活動であるから、非道徳的な低俗な図書は排除する。会員の宗派は雑多であるから、神学書や刺激的な論争書は買わない。読書室で政治論争(politische Zaenkerie)をする

ことのないよう、充分監督する。

チャニング牧師の労働者教育論は、階級闘争や権力闘争を否定し、精神的向上を追求させようとする思想であり、^{上に引}読書室も、慎重に政治的闘争化を避けながら、民衆の啓蒙を進めようとする方針に導かれていて、さきにわれわれがみたブルームの労働者教育思想の流れを汲むものであることがわかる。

イギリスから帰国するとラウマーは早速、ベルリンでイギリス型の民衆啓蒙運動を開始し、1841年12月5日、学術講演協会 (Verein fuer Wissenschaftliche Vortraege) を結成した。これは職工学校を模範とする民衆啓蒙団体であるが、対象はいわゆる教養市民 (gebildetes Publikum)、上流社会層 (hoechste Gesellschaftskreise) であり、プロイセンの皇太子が出席することも稀ではなかった。設立を推進したのは、ベルリン社交界 (Berliner Gesellschaft) や、ベルリン大学、アカデミーのメンバーであった。当時ラウマーはアカデミーの事務長を勤めていたので、その立場をうまく利用したのである。⁹⁾

協会の目的は「専門学者とその他の教養市民の間の分裂・対立をできるだけなくし、両者の相互理解を深める」ことにある。婦人の参加も歓迎し、講演は専門的学術用語を知らなくとも理解できる一般的な言葉で行われなければならない。¹⁰⁾ こうした通俗化にたいしては、歴史法学者ザヴィニー (Friedrich Karl von Savigny) が反対し、歴史学者ランケ (Leopold von Ranke) も結局参加を辞退した。ただ自然科学者フンボルト (Alexander Humboldt) はこれに強い賛意を表した。

講師はラウマー自身のほかに、哲学者エルトマン (Johann Eduard Erdmann)、哲学者トレンデレンブルク (Friedrich Adolf Trendelenburg) など、ベルリン大学教授が多かったが、とりあげるテーマは「ワインについて」「泣くことと笑うこと」「錬金術」など、一般教養市民が興味をもちそうなトピックを主とした。講演会は月1回、入場料は2ターラーであった。謝礼を受け取らない講師が多く、会費が蓄積されて、数年もすると6000ターラーの貯金がたまった。この啓蒙運動の反響は大きく、ケーニヒスベルク、ブレスラウ、ボン、シュトゥットガルト、ライプツイヒなどの大学都市でも類似の活動がおこされた。¹¹⁾

1845年ラウマーはアメリカへ渡航し、新世界の社会、文化、教育、経済、政治の様子をつぶさに視察した。この旅行中、ラウマーは特に公共図書館運動に開眼し、その感動をドイツに持ち帰った。ラングフェルトの要約するラウマーのアメリカ紀行

によると、彼はまずニューヨーク州の学区図書館 (Bezirksbuecherei = School District Library) を紹介した。すなわち、同州は学区図書館のために95,000ドルを支出、学童・生徒ばかりでなく一般市民にも利用させている。年間受け入れ図書は1843年で875,000冊に達する。運営資金は州と自治体が同額支出する。宗教的傾向は弱く、図書選択も自由である。

またアメリカでは、一般民衆対象の各種講演会が盛んに行われ、学者が市民の啓蒙につとめている。「アメリカ人は、デモクラシーが一般教養と精神の啓発によってのみ保障されるものであることを知っている。」職工達は自力で建物を作って図書館 (Lesebibliothek, Lesezimmer) としている。¹²⁾

ラウマーは次のような、旅行中のエピソードを記している。

「アメリカの市民(……)が蒸気船の上で、デメトリオス・ピオルケテスやフィロボイメンについて、例のあやしげな民衆図書館で得た正確な知識でもって、私に話しかけてきた。」¹³⁾

ごく普通の市民が古典ギリシャの世界の知識をもっていることが、まずラウマーを驚かせたが、そうした知識を彼らが、様々の団体図書館から借りてくる図書から得たという事実は、彼を公共図書館運動へと駆り立てた。るに+かみ、

彼は1846年4月27日、これまで教養ある市民(gebildetes Volk)の世界に限られていた「知識」を、さらに幅ひろい民衆にもたすために、ベルリン市に民衆図書館 (Volksbibliothek) 4館を開設することを提唱した。設立資金としては、学術講演協会が4000ターターを支出する。下層民衆にふさわしい通俗的な図書は決して多いとはいえないが、すぐれた図書であれば多数の複本を備え付ければよい。読書は仕事の邪魔になるとの意見もあるが、特に支障となるものではない。アメリカ人は読書しながら、職業労働において最も勤勉である。「小説やその他、静かな教育にふさわしくない図書は、アメリカにおけると同様、この公共の蔵書には受け入れられない。」¹⁴⁾

市参事会 (Magistrat)はこの提案を受け入れ、市議会代表と学術講演協会代表とが協議して、1846年10月10日、協定が成立した。それによると、図書館設立の経費4000ターラーは協会が負担し、市役所は~~市役所~~^(図書館)を市の機関(staedtisches Institut)として監督下におき、管理、維持、拡張の経費を負担する。図書館運営のために、6～7名から成る委員会(Kommission)を置く。委員会は市参事会の監督下に

おかれる。図書館は、保証金(Buergschaft)を支払う「すべてのベルリン市民」に利用できる。貸出は無料、貸出期間は14日とする。良書で希望の多い図書は十分な複本をそなえつける。通俗的な良書が少ないので、委員会は学術書の改作(Bearbeitung)に奨励金を出す。これはイギリスの有用知識普及協会の活動から学んだ方法である。¹⁵⁾

通俗書出版の奨励はブルームの方式をとり入れたものであるが、委員会運営方式はアメリカの制度から習ったものであろうか。一般民衆のための公立、無料、公費経営の図書館という、近代公立図書館の理念がここに明確に示されているが、保証金をとることによって、公開制の原則に制限が課せられ、理念の徹底を欠いている。

翌1847年、ラウマーは市議員に選出され、彼の尽力もあって、市議会が学校の教室を図書館に充当することを承認、3年間試行することが決定された。この計画にたいしては、プロイセン皇太子が寄付をなす手筈になっていたが、国王の承認が遅延するうちに、ベルリンで3月革命が勃発、計画は保留され、またラウマー自身もベルリン市の派遣する議員としてフランクフルト国民議会に加わって、完全に放置状態におかれた。

革命が挫折し、ラウマーがベルリンへ戻ると、1848年12月4日に国王が図書館設立を条件付きで認可した。示された条件とは次のごとくである。

「道徳性(Sittlichkeit)、宗教、国家を危険にさらす傾向のある図書はすべて、極力慎重に図書館から遠ざける。一方、道徳、信仰、忠誠心を強固にすることを目的とするような図書は、優先的に図書館のために選ぶ。」¹⁶⁾

ラングフェルトは、プロイセン内閣が国王の認可を遅らせた理由は、ラウマーのアメリカ紀行が政府にとって「あまりに民主的、あまりにリベラル」であったためではないか、と推測している。⁽¹⁷⁾ たしかにラウマーは、ドイツ国内では比較的リベラル派に属し、民衆啓蒙に熱心な学者であった。しかしフランクフルト国民議会においては、ファーベル(Karl-Georg Faber) の分類する4勢力、すなわち中道右派(rechtes Zentrum)、中道左派(linkes Zentrum)、右派(Rechte)、民主的左派(demokratische Linke)の中では、中道右派の大ブルジョアジー・大学教授グループに属した、立憲君主制論者であった。¹⁸⁾ しかもプロイセン国王をドイツ皇帝に即けようとして交渉にあたった人達の一人でもあった。ラウマーの教育思想は、近代資本主義をささえる民衆啓蒙思想というより、ドイツ帝制をささえる忠誠心を育てるための民衆啓蒙思想で

あったというべきであろう。ドイツの資本主義は常に絶対主義と表裏をなして発達し、これがドイツの後進性を特徴づけるのであるが、ラウマーの公立図書館思想もそうした流れのなかに位置づけるとよく理解できる。

ベルリン市立民衆図書館 (Staedtische Volksbibliotheken zu Berlin) は 1850 年 8 月 1 日、4 館一斉に開館された。蔵書はあわせて 7400 冊、開館時間は水 - 土が 12 - 13 時、日は 11 - 12 時とされた。貸出業務には各学校の教師があたった。利用は全ベルリン市民に無料で公開され、先に予定されていた保証金はとらず、そのかわりに身元保証書 (schriftliche Buergschaft) を提出させる方式とした。身元保証書を発行する ~~保証~~ 手続 をもつものは

1. ベルリン市の公務員で公印 (Dienstsiegel) をもつ者
2. 職工業者ギルドの組合長
3. 地方労働者階級福祉協会の幹部
4. 図書館の管理者が信用できると認めるすべての人々

利用者には貸出許可カード (Erlaubniskarte) が交付され、図書受取票 (Quittung) の用紙は 1 ダース綴り 6 ペニツヒ (のち 5 ペニツヒ) で売られ、1 枚に 1 冊記入することができる。¹⁹⁾

開館直前に蔵書目録が印刷された。全 100 頁で、4 館の全蔵書が、18 門分類の順に記入され、著者名索引が付された。この目録によれば、開館時の蔵書構成は、寄贈書がかなりあり、歴史は基本的なものが揃っていたが、自然科学の寄贈書は古いものも少なくなかった。購入した自然科学書はよく選択され、労働者・手工業者にふさわしい近代的な実業書 (gewerbliche Literatur) も いい蔵書 となっている。²⁰⁾

その後の発展状況はつぎのとうりである。

年	館数	蔵書冊数	利用者	貸出冊数
1850	4	7,411	885	20,000
1855	4	11,000	2,869	86,040
1860	5	15,000	4,058	---
1865	6	23,649	6,554	103,530
1870	11	43,509	10,325	198,939
1875	16	67,502	13,942	259,427
1880	21	86,812	16,527	308,401

当初、利用者の内訳は、商人・職工・手工業者が半数をこえ、ついで学生が1/5をしめた。その後、職工の比率はじょじょに減少し、学生、婦人の比率が増加の傾向を示したが、民衆図書館としての原則が変わることはなかった。²¹⁾

4館のうち、第1館はギムナジウム内におかれ、やや学術的著作の多い図書館となり、他の3館は市立上級学校(hoehre Stadtschule)、つまり実業学校(Realschule)に設置され、それぞれ戸棚2~3台が新しく備え付けられたが、机、椅子は学校のものを使用した。²²⁾ これらはいずれも貸出図書館(Ausleihbibliothek)であり、館内利用の必要はほとんど考慮されていなかった。ベルリンでは、1892年にブッフホルツが図書館委員会の諮問にこたえて、第13館以下の6館に読書室(Lesezimmer)を設備することを要請したが、受け容れられなかった。この頃、読書室運動(Buecherhallenbewegung)の運動主体のひとつとして、全国に読書室を設置する運動をすすめていた倫理文化協会(Gesellschaft fuer Ethische Kultur)が、フライブルク(1893.5) フランクフルト(1894.10)、ベルリン(1895.1)と読書室を開設した。これをみた市予算委員会は、市立図書館にも読書室をおくことを勧告し、1896年3月、市議会がこれを採択した。第1読書室は第1館の1階に、ついで3館にあいついで読書室が設けられた。²³⁾ これがチャプランのいわゆるアメリカ・パブリック・ライブラリー思想のドイツへの影響の第2段階である。——に該当する変革である。

ドイツの市民階級は、プロイセンの絶対主義体制と決定的に対立することをしなかった。ラウマーの学術講演協会を聴講したベルリンの上層市民は、こうした文化活動を通して上流貴族階層にはいりこもうとし、かくて封建勢力とブルジョア階級が合流して、下層民衆、労働者に対立した。3月革命を挫折に追い込んだのも、封建勢力とブルジョアジーの協力関係であり、これがドイツ資本主義の後進性といわれるものの実態である。イギリスのベンサム主義者の労働者啓蒙運動や、アメリカの民衆図書館運動の思想が、3月革命期のドイツ社会に導入されると、英米の資本主義イデオロギーの色彩を失って、封建制度、絶対主義、資本主義の融合した奇妙な体制を維持するためのイデオロギーと化してしまった。そしてこの変質は、「道徳、宗教、忠誠心」を強化するための読書普及を条件として課した国王の認可書によって、決定的となったのである。図書館が公の機関として設立されるためには、それだけの経済的その他の負担をかけるに値する利益を、権力の側にもたらすものでなければならない、また権力は、かならず図書館を体制維持の手段として利用しようとするものである、とい

歴史の金糸別

う~~要~~を、この認可書ほどに明快にわからせてくれるものは他にない。

註

1. Allgemeine Deutsche Biographie. "Raumer, Friedrich von".
2. Raumer, Friedrich von. England im Jahre 1835. 1.Theil. Leipzig: Brockhaus, 1836. S.554.
3. Ibid., SS. 552-556.
4. Raumer, F.v. England im Jahre 1841. Leipzig: Brockhaus, 1841.SS.97-98.
5. Ibid. SS. 105-110.
6. Ibid. S.110.
7. Channings lectures on the elevation of the laboring portion of the community とだけ脚註されているが、これは Mechanics Apprentices' Library Association の主催した集会で行われた2つの講演のことを言うものと思われる。 Cf. Channing, W.E. "On the Elevation of the Loboring Classes", in his : The Works of William E. Channing, new and complete ed., rearranged. Boston : American Unitarian Association, 1875. pp. 36-66.
Channingについては別稿において詳論したので、ここでは省略する。
8. Raumer. England im Jahre 1841, SS. 236-8.
9. Langfeldt, op. cit., S.275.
10. Ibid.
11. Ibid. SS. 275-6.
12. Ibid. SS.279-280.
13. Thauer & Vodosek. op.cit. S.30.
14. Buchholz, Arend. Die Volksbibliotheken und Lesehallen der Stadt Berlin 1850-1900:Festschrift der Stadt Berlin zum fuenfrzigen Bestehen der Volksbibliotheken 1. August 1900. Berlin, 1900. SS. 87-90."Die ersten Vorschlaege Friedrich von Raumers vom 27. April 1846".
15. Ibid. SS. 15-16.
16. "Koenig Friedrich Wilhelm IV Genehmigt am Dezember 1848 die Annahme von 4000 Thalern zur Gruendung von Volksbibliotheken", Buchholz, op.cit. S.91.
17. Langfeldt. op.cit. S.282.

18. Faber, Karl-Georg. Deutsche Geschichte im 19. Jahrhundert : Restauration und Revolution von 1815 bis 1851. Wiesbaden: Akademische Verlagsgesellschaft Athenaion, 1979. ㊦
19. Buchholz. op. cit. S. 26.
20. Ibid. SS. 28-30
21. Ibid. SS. 106-8.
22. Ibid. S.24.
23. Ibid. SS. 66-69.

追補

19世紀中葉の公共図書館史に関係する原資料は、日本ではほとんどお目にかかれず、どのような文献があるのかすらも分かりにくいのだが、ごく最近発表された次の解題書誌が、この時期の原資料を丁寧に紹介してくれているので、参考までに紹介しておきたい。

Knoche, Michael : "Die deutsche Bibliotheksbewegung der vierziger Jahre des 19. Jahrhunderts -- eine annotierte Quellenbibliographie" Bibliothek Forschung und Praxis, 11(2), 1987, SS.184-194.